

日本語相談談話の談話分析

——相互行為方略・発達過程を観点に——

研 究 者：星野祐子

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
博士課程学生)

研究成果要約

研究活動概要

本研究では、課題解決に向けての“話し合い”という目的指向性をもった会話において、会話参加者がどのように話し合いに参加し、最終的な合意を形成しているのかについて、談話分析的な手法を用い分析を行った。分析データは、大学生グループ8組、小学生グループ8組による話し合い活動で、それぞれの発達段階に見合った類似の課題を与えることで、大学生と小学生の話し合い活動の特徴を比較、検討を試みた。

なお、話し合い終了後には、グループでの話し合いをビデオで再生し、自分たちの話し合いを振り返る機会を設けた。その後、話し合いの振り返りを共有し、互いの発話や話し合いに対する参加態度について話し合う時間を取った。この事後活動も録音・録画し、話し合い活動に関わる効果的な学習材開発の資料とした。

研究概要

【分析1】では、大学生のデータを用い、話し合いの談話展開と各段階に出現する発話戦略について考察した。まず、話し合いに出現する発話を先行研究にならない、課題解決に直接関わる「内容的な発話」と、話し合いの進行や手続きに関わる「手続き的な発話」に分けた。

内容的な発話に関しては [要求系列]、[提供系列]、[応答系列] を設けた。それぞれの系列には、直接的に発話意図を満たすものから、含意で間接的に伝えるものまで、質の異なる様々な戦略が属し、今回の研究では [応答系列] の下位系列にあたる [保留系]、[不同意系]、[同意系] に多様な戦略を見いだすことができた。

続く [手続き的な発話] に関しては、話し合いの開始段階、中盤、終了段階それぞれにおいて、話し合いの効果的な進展に貢献する特徴的なやりとりがあることを指摘した。この [手続き的な発話] が、話し合いの開始段階と終了段階に出現することで、一連のやりとりにまとまりが与えられる。

【分析2】では、大学生のデータを用い、[提案] と [応答] の連鎖について、会話参加者の相互作用の観点から分析を行った。分析の結果、[提案] にせよ [応答] にせよ、他者との協働によって、一提案もしくは一応答を形成する共同発話的なやりとりが観察された。

【分析3】では、小学生の話し合い活動を分析した。結果、4年生では拡散的な意見の提示に終始するが、6年生では、先行発話をふまえた上での意見提示が可能となり、さら

に、話し合いの展開を意識した手続きの発話が多く出現していることがわかった。また、小学生と大学生との話し合い活動を比較した結果、協働的な話し合いを意図するならば、「話す力」以上に「聴く力」を高める必要があることが示唆された。先行話者に対して「再度話す機会を与える」ような応答を返すことが、話し合いを深めるにあたって重要なのである。

研究活用について

研究成果の一部は、社会言語科学会（第21回大会 於 東京女子大学 2008年3月）で既に発表した。今後は、日本語学的な知見を国語教育に還元することを意図し、話し合い活動、特に、会話参加者と協働的に話し合いを進める活動についての学習材を作成する予定である。また、指導者向けの評価観点についても言及したい。

今後の研究課題

今回、十分に言及できなかった小学生の話し合い活動について、質的・量的ともに分析を拡充したい。また、小学生・大学生を対象にそれぞれ行った話し合いの振り返りについては、今回の研究では、十分活用できなかったので、今後、振り返り学習を行う効果と教材化の可能性について検討を試みたい。